

## ティーチング・ポートフォリオ

大学名 東京都市大学  
所 属 都市生活学部  
名 前 西山 敏樹  
作成日 2021年8月3日  
修正日 2021年9月16日

1. 責務
2. 理念
3. 方法
4. 成果
5. 目標

## 1. 責務

自分の所属する都市生活学部は、「未来の都市生活の質的向上」に資する研究・教育・社会貢献を具体化する場である。従来の都市研究の技術偏重を脱し、生活者の価値観・社会の技術進展・技術の波及を支援する制度のバランスに根差して、クオリティの高い未来の都市生活の実現方策を描ける人材を学際的に育成することを重要視している。特に、専門領域であるユニヴァーサルデザイン、都市と交通(アーバンモビリティ)、マーケティングリサーチの研究・教育・社会貢献に根差し、都市生活者の価値観に基づく技術・制度を紡ぎ出し、誰一人取り残さない SDGs 都市社会を創出することが都市大教員としての責務である。またそうした学際的な都市研究の方法論を確立し広く社会に波及させていくことも責務である。

## 2. 理念

社会科学・自然科学の枠にとらわれず、未来の都市像を価値観・技術・制度のバランスをとって現実的・着実に描ける人材を多く輩出することを研究教育活動の第一理念とする。特に、都市を創造する上では制度的側面が大切で、倫理観をもって未来の都市の仕組みを考えられる人を先導できる立場の高等人材を輩出することも重要視する。特に、「未来の都市はこうもあるべきではないか？」とあるべき姿をしっかりと考え、その中でバックキャスト的に未来への対応策を柔軟に案出できる人材の育成を大切にしたい。自身の専門はユニヴァーサルデザインで、誰もが過ごし易い環境や使いやすい製品、サービスを多数研究してきた。未来への対応策を考える上ではユニヴァーサルデザイン7原則の「公平な利用」、「利用時の柔軟性」、「単純で直感的な利用」、「認知できる情報」、「失敗に対する寛大さ」、「少ない身体的な努力」、「接近や利用のためのサイズと空間」が極めて大切である。この7原則をベースにして未来の都市の創造に向けた具体的な対応策を描ける人材の育成を目指していく。ユニヴァーサルデザイン志向であれば、「誰ひとり取り残さない」という SDGs 未来都市の理念も達成できる。そうして「都市研究の都市大」ブランディングを具現化し、未来を思索的かつ現実的に描ける有為な人材の輩出を具現化する。

## 3. 方法

自身は、未来の都市像を着実に描けるようにするためのプランニングの発想法として、イギリス由来のスペキュラティブ・デザイン手法(思索的デザイン手法)や、日本でも研究が進むシナリオプランニングの手法について研究を行い、地方自治体や企業等と連携しそれらを活用した未来都市の創造プロジェクトを鋭意進めている。予定が未定な未来を予測することは容易なことではない。しかし、都市生活者や都市の専門家と協働して、「未来はこうもあるべきではないか？」と未来の都市像を考えて、確度が高そうな像に近づいていくための対応策を研究し、未来に近づいていくこと自体は可能である。こうした手法を用いながらバックキャストな志向で未来の都市のあるべき姿を描いて、それらの未来シナリオに対する具体的な対応策を考えていく方法論を学生諸君が磨ける場の創出を心がけている。自身の研究やプロジェクトでも一定の研究教育成果が出ており、学生への教育の価値があるものと判断し、関連教

育を展開している。PBLの一環でもそうした未来都市像を描く内容を推進しており、学生の未来の都市の予測力を高めるよう努めている。自身はスペキュラティブ・デザイン手法の教科書を2021年3月に上梓している。この中では、未来の都市を革新的に改善するための8つのものの見方を次のように提唱した。

- (1)複数の分野をまたぐ知を創出しよう
- (2)複数の分野のすき間に位置する知を創出しよう
- (3)複数の分野が融合した知を創出しよう
- (4)複数の分野に共通する知を創出しよう
- (5)複数の分野を包括・統括する知を創出しよう
- (6)各分野の先端部分の知を創出しよう
- (7)常識を疑い逆の方法がないかを探ろう
- (8)他の方法を自分の分野にあてはめてはめてみよう

こうして、時には各分野のイノベーションの融合で未来都市を創造するために有用な最先端の知を紡ぎ出せるよう指導をしている。ここに、専門のユニヴァーサルデザインの7原則も考慮させて、未来都市の像を精緻に予測できるようにする。そうした形で学生の未来想像力を高める活動を進める所存である。加えて、学生がどこまで未来都市の予測の方法を理解してくれているかを評価しながら、当該テーマの教育方法の改善につなげていければと思う。学生にもレベル差があり、未来の都市の創造過程であらゆるものの見方でよい提案をまとめられるよう、教育手法の改善も視野に活動を進めていく所存である。

今後も、学生の能力や興味が様々な点には注意をして教育の工夫をする。上記の(1)~(8)はのような未来のものの見方は、経験上自分の好きなこと、ジャンルに基づいて身に着けることが一番である。たとえば自分は、乗り物が好きなので未来の車輛やモビリティを常に考えながら(1)~(8)を身に着けた。学生には真摯かつ丁寧に向き合い、対話を繰り返しながら学生の能力や興味のあることを引き出し、明確化させ未来の姿を考えさせる「問い」をたくさん与えてあげて、多面的にもものを見る重要性を身につけさせる。

対話が必要なので、研究室の大学院生・学部生との上記の対話にはものすごい時間と労力がかかる。但し研究を共にしながら個々の関心を引き出すことは大切で、夜遅くまでつきあい成果をあげているという自負もある。今後も丁寧な対話を繰り返しながら未来都市を見る眼をしっかりと養っていきたいと思う。

#### 4. 成果

「未来都市がこうもあるべきではないか」と考える癖を指導する学生諸君がつけ始めているのは大きな成果である。また「未来の都市はこうもあるべきではないか」と考え、未来に近づいていくための対応策を考える活動の重要性が評価され、スペキュラティブ・デザインの教育本を上梓した。併せて、本の

内容が企業や地方自治体のイノヴェイティブな活動に大きく資するものとして高く評価され、日本イノベーション融合学会の2021年度学術貢献賞を受賞するに至った。自身の講義科目である「ユニヴァーサルデザイン」や「都市と交通」等の科目でも、未来都市を検討する機会としてスペキュラティブ・デザインのワークショップを実施し、学生諸君からその思考方法・思考プロセスに対して高い評価を得られている。

## 5. 目標

ユニヴァーサルデザインの哲学とスペキュラティブ・デザインの未来都市創造哲学に基づいて、難しい未来予測の愉しさや意義をわかりやすく、効果的に伝えることが目標である。フォアキャスト的な通常の未来予測の方法ではない、スペキュラティブ・デザインのバックキャストでの未来創造の意味をしっかりと伝えられるよう、今後も手法の研究・実践と中級レベルの本の執筆に努めていきたい。併せて、大学院生や社会人教育の場にも教育を行い未来都市研究の基地として都市大を発展させていく。

### 【添付資料】

平賀俊孝・根本正樹・西山敏樹, **FUTURE DESIGN 未来を、問う。: 夢が生み出すスペキュラティブ・デザインと未来のつくりかた**, クロスメディアパブリッシング, 2021.

以 上